

第45回日本泌尿器科学会群馬地方会演題抄録

日 時：平成 19 年 2 月 17 日 (土) 15 時 00～
場 所：群馬大学医学部刀城会館
会 長：小林 幹男 (伊勢崎市民病院)
事務局：柴田 康博 (群馬大院・医・泌尿器病態学)

〈セッション I〉

座長：曲 友弘 (群馬大院・医・泌尿器病態学)

【臨床症例】

1. 頻尿を主訴とした成人女性の傍尿道嚢腫の 1 例

河野 真意, 森川 泰如, 小池 秀和
中里 晴樹, 新井 誠二, 狩野 臨
関根 芳岳, 福岡 裕二, 曲 友弘
山本 巧, 柴田 康博, 羽鳥 基明
伊藤 一人, 鈴木 和浩

(群馬大院・医・泌尿器病態学)

鈴木 慶二 (群馬大学名誉教授)

女性尿道嚢腫は尿道と交通のない嚢腫と定義され、尿道周囲に存在する稀な疾患である。症例は 43 歳女性で頻尿にて他院で精査中、MRI にて尿道全周性に多房性嚢胞認め当科紹介された。尿道膀胱鏡では粘膜の異常はなく、尿細胞診は class II であった。腰椎麻酔下での直接穿刺による内腔造影では尿道膀胱との交通はなかった。さらに経膈エコー下に針生検行ったところ、悪性所見なく傍尿道嚢腫と診断した。病理診断はリンパ管腫であった。治療は穿刺吸引のみであったが症状は軽快した。本疾患は分娩、性交による尿道損傷、感染などとの関連性が報告されている。外陰部腫瘤の自覚や膀胱炎症状などを主訴に見つかることが多い。治療は全摘除が行われている症例が多く、病理学的には扁平上皮、移行上皮などを呈する。今回のように尿道嚢腫が病理学的にリンパ管腫と診断された例はない。尿道リンパ管腫も世界で 2 例しか報告されておらず、いずれも未成年男子であった。

2. 輸血関連急性肺障害 (Transfusion-Related Acute Lung Injury) が認められた前立腺癌骨転移の一例

森田 崇弘, 田村 芳美

(利根中央病院 泌尿器科)

83 歳, 男性. 主訴は呼吸苦. 前立腺癌 T4N2M1 stage D2

として内分泌療法中、平成 18 年 1 月 12 日、前立腺からの出血と思われる膀胱タンポナーデにて入院。1 月 13 日、Hb6.8g/dl のため、照射 MAP 輸血開始し、5 時間後に呼吸苦出現。血液ガス分析は、PO₂ 28.6, PCO₂ 22.9, SPO₂ 62.4% と低酸素血症で胸部 X-P は肺水腫の所見であった。輸血関連急性肺障害 (TRALI) も疑われたため、家族に挿管を含めた呼吸管理と薬物療法を提示したが、挿管は希望されず。その後、急激に全身状態悪化し、1 月 14 日、永眠された。日赤に経過を報告し、TRALI の確診の症例となった。TRALI は、輸血開始後数時間以内に非心原性の肺水腫による呼吸困難を呈する重篤な輸血による副作用である。TRALI を経験したので文献的考察も含め、報告する。

3. 塞栓術で改善した右腎動静脈奇形の 1 例

岡村 桂吾, 篠崎 忠利, 上原 尚夫

真下 透, 加藤 雄一 (善衆会病院)

森田 英夫 (群馬大院・医・核医学)

症例は 37 歳女性。既往歴に 30 歳のとき右尿管結石にて碎石術がある。肉眼的血尿で来院、膀胱タンポナーデであった。CT にて右腎動静脈奇形が疑われた。輸血や安静などの保存的加療にて血尿は一時改善したが、数日後再び肉眼的血尿出現。その後血尿改善せず、血管造影を施行した。右腎動脈分枝から静脈へのシャントが確認された。右腎動脈をオクルージョンバルーンにて閉塞し腎血流を止めたのちリピオドール製剤にて塞栓術を行った。肉眼的血尿が消失し、症状の改善を得た。3ヶ月経過したが、その後は血尿が見られていない。

4. PSA 低値の前立腺癌 3 例

岡本 亘平, 黒川 公平

(国立病院機構高崎病院 泌尿器科)

小川 晃 (同 研究検査科)

悦永 徹 (富岡総合病院 泌尿器科)

症例 1 : 47 歳. 尿閉・腎後性腎不全で入院. DRE・TRUS は前立腺癌疑い. PSA0.5ng/ml. 生検は GS5+5, Stage D2